

グルジア・パンキスイ渓谷問題の 種族・信仰的背景

北川 誠 一

はじめに

一九九二年にソ連から独立したグルジア共和国の政治課題は、一言で述べると、ソ連時代のグルジア国家の領土の一体性を確保すること、及びその領域においてロシアの影響を排除し、完全な国家主権を行使することであろう。領土の一体性とは、ロシア連邦への帰属変更を求めて内戦が勃発し、休戦後も問題未解決のまま膠着状態にあつて、事実上グルジアの権力が及ばないソ連時代の自治共和国アブハジアとソ連時代の自治州南オセチアをどのような手段によつてであれ、あるいはどのような法的形態であつても、グルジアの国境内に留めるということである。これまでの交渉の中ではアブハジアの基幹民族であるアブハジア人に対しては、最大の条件とし

てグルジアと同等の立場の連邦制さえ提示されている。グルジア政府が、基幹民族ではなく過去の移民の子孫であると認定するに留めている南オセチアのおセチヤ人や、アルメニア人が多く住みとみに自立化を強めているジャヴァハヘティ(Javakheti)地方に対しても新しい国家的統合の形態が示されねばならない。またグルジア人イスラーム教徒掌握の手段として設置されたアジャリア自治共和国は、住民の多数がグルジア人であるのでアブハジアや南オセチヤとは異なり民族的基盤をもたず、ガムサフルディア(Nivard Gamsakhurdia)グルジア初代大統領のようにアジャリアの自治権に否定的な意見を述べる者もあつた。それにもかかわらず、アジャリアは独立移行期に混乱が少なかったこともあつて、ソ連時代に形成された在地の権力構造温存と良好な対露関係を背景に、自立化傾

向を強めていた。二〇〇四年のアバシツェ (Aslan Abashidze) アジャリア大統領失脚事件は、同自治共和国をグルジアへ引き戻す運動の現れであると評価することも可能であろう。

主権の維持とは、分離運動などを切り札として使いつつソ連時代の国境内で一定のヘゲモニーを行使しようとしているロシアが、グルジアの内政や外政に圧力をかけるのを排除することである。グルジア領内のロシア軍基地問題もこれに拘わる懸案事項であろう。かつて、南オセチアやアブハジアで分離運動が盛んになった一九八九年、グルジアではモスクワは、南オセチアあるいはアブハジアのカードを切ったという比喩が語られた。ソ連政府はグルジア内部の分離運動を煽動することでグルジアのソ連からの独立運動を阻止しようとしているという意味である。ソ連崩壊後もロシア政府は、隣国アゼルバイジャンと協調しつつ原油輸送や防衛の面でソ連から離れEUやNATOに近づこうとするグルジアを、ロシア中心の政治、軍事、経済ブロックの中に留めようとした。そのためにロシアは、アブハジア、南オセチア問題解決に対しても積極的な参加を試みてきたのである。ロシアは、アブハジアと南オセチアのロシアへの併合を主張しないものの、アブハジアと南オセチア駐留平和維持軍中におけるロシア人部隊の存在感は大きい。グルジアにとっては、次第にロシアとの社会経済的一体化を強める両地域を放置したままで、CIS圏から離脱することは不可能であるから、領土の保全と主権の維持は、一つの現象の二つの側面であるとも言うことができる。

一方グルジアも第一次チエチエン戦争終了後は、直接の隣国であるチエチエン共和国と活発な外交を展開した。その象徴は、グルジアの首都トビリスイにチエチエン政府代表部が設けられたことである。また、チエチエン原油のグルジア経由の輸出についても検討されたとも言われる。これはロシアにとっては忌々しい事態である。第二次チエチエン戦争期の二〇〇一年から二〇〇三年にかけては、チエチエン側ゲリラのグルジア領内、特にグルジア北東部パンキスイ (Pankisi) 渓谷逃げ込みを巡って、グルジア、ロシア両国の間で厳しい批判の応酬が続いた。ロシア側はチエチエン・ゲリラのグルジア側への逃げ込みと越境侵入、グルジアの特定の地域がゲリラの出撃、後方基地化していることを指摘し、国境の警備とゲリラの引き渡しを要求した。そしてそれが出来ない場合はロシア軍の越境攻撃もありえることを示唆した。当時のシェワルナゼ (Shewardnadze) グルジア大統領は自国領内におけるチエチエン・ゲリラや外国人傭兵の存在を否定し、ロシア軍のグルジア国境の侵犯、国境を越えた攻撃には強く抗議した。グルジア側国境警備隊には、配置された兵員数からしても、国境の完全なコントロールは不可能であった。グルジアはロシア軍のグルジア越境攻撃やロシア・グルジア共同作戦を拒否した。またグルジア国内に残存するロシア軍基地撤廃を言及しつつ、電力、ガスの供給、グルジア市民のロシア入国ビザ等の問題を抱える対ロシア交渉の切り札としてチエチエン・ゲリラ問題を利用した。しかし、ゲリラの不在を主張するシェワルナゼ前大統領の戦術は、九・一一同時多発テロ事件およびテロ

リズムに対する作戦以降、正反対に変わり、国内のテロリストの存在を認めた。というのは、掃討のためにアメリカと共同軍事行動をとることは、ロシアの影響力の排除を目標とするグルジアの国益に合致することになるからである。ロシアとアメリカ合衆国の間に座を占めたシェワルナゼの細かい駆け引きの要となったのは、グルジアとチェチェンの国境問題そのものを除くと、主としてグルジア内部のチェチェン人居住地域であるパンクスイ渓谷の管理を巡るものであった。従ってシェワルナゼの二元外交は、グルジア国内にチェチェン人が集住する地域が存在しているという地政学的環境に負っているということが出来る。この時期のグルジア、ロシア間の外交問題全般については、広瀬陽子「ロシアの対コーカサス外交——テロと紛争の狭間で揺らぐ国際関係」(松井弘明編『9・11事件以後のロシア外交の新展開』財団法人日本国際問題研究所、二〇〇三年)等の論考があるが、パンクスイ渓谷の存在そのもの、及びそれが外交上の問題になり得る個々の要件については、詳細な議論は少なかった。ここでは視点を特定の問題、渓谷の地理的・民族的・宗教的位置に限って、この問題を考察するが、先ず事件の経緯を示そう。

一 パンクスイ渓谷チェチェン人ゲリラ逃げ込み問題

パンクスイ渓谷問題がグルジア、ロシア間の政治的懸案として認識されたのは、一九九九年三月のステパシン(C. Stepanin)、シェワルナゼ会談においてであるが、このとき協議されたのは地元マフィアの問題であった。グルジア、ロシア国境は麻薬取引の温床

となり、パンクスイ渓谷のドウイスイ(Duisi)村では公然と薬物が取引されていた。犯罪者のグループは家畜を盗むだけでなく、住民や旅行者、更にはグルジアの地方官憲を誘拐した。当時チェチェンには七人のグルジア人人質がいると報道されていた。⁽¹⁾二〇〇一年六月には、キスト(Kisti)人マムカ・アラブリ(Mamuka Arabuli)が地元役人を誘拐したのに対抗して、現地のグルジア(ブシャヴ)人自警団長ルカ・ラマザシュヴィリ(Luka Ramazashvili)が路線バスを止めチェチェン人およびキスト人五名人質にした事件は、グルジア政府が治安確保の能力と予算を欠いていることを如実に示すものであった。このようにパンクスイの治安の悪化は、アルカイダが原因ではなかった。グルジアの国会議員でコーカサス民族関係委員会委員長のマムカ・アレシジェ(Mamuka Arashidze)〈一九五七年生れ〉は「私は、パンクスイの状況を一九九六年から述べてきたが、私の情報は内務省レヴェルで止められた。パンクスイには人工的に犯罪地区が作られて、それには誰も彼もがかわつていた。二つのチェチェン戦争の間の平和な期間にはここでは大金をつくることができた。グロズヌイの工場でヘロインを製造し、パンクスイでは麻薬を隠しておいて、あちこちに送った。ここへはチェチェンからだけでなく、アフガニスタンや旧ソ連の中央アジアの共和国からヘロインが送られてきた。グルジアは弱体化して、安定化の途中だった。少しばかりの金で平から署長まで警察全体を買収することができた。一九九六年にチェチェンから最初の人たちが来たが、彼らは避難民ではなく、チェチェンに出かけていて、帰省した地元の人

キスト人だった。ドウダエフが登場したときパンクスイ出身の大勢の人々が、若いチェチェン共和国の建設にかかわりたいと思ったのである。また、ある人達はただ単に母語によりグロズヌイ大学で勉強するために出かけたのだ⁽³⁾と述べる。

グルジア政府もこの状況をまったく放置していたのではなかった。一九九七年グルジア内務省は渓谷の中心ドウイスイに警察署を設置しようとしたが、住民の反対に遭い、当時のアスラン・マスハドフ、チェチェン共和国大統領の顧問クタイエフ (A. Kutayev) の仲介があつて、ドウイスイの手前数キロメートルの地点に検問所を設けるに留まつた。⁽⁴⁾

一九九九年にはイスラーム原理主義の影響が浸透し、アフメタ郡全体で五〇人のワッハブ派があり、パンクスイのキスト人とダゲスタンのアッキ (Akki) 人の間に勢力を拡大した。また、特に「ドウダエフ軍団」を率いるサルマン・ラドウイエフ (Salman Raduyev) は、グルジアとダゲスタンのチェチェン人、すなわちキスト人とアッキ人を統合するためにアレクスイ・カフタラシェヴィリ (Aleksij Kavtarashvili) なる人物を派遣したと⁽⁵⁾う。第二次チェチェン戦争開戦直後に始まった避難民の流入は、パンクスイ情勢を複雑にする要因となった。九月一日から一〇月一〇日まで、二千人がコーカサス山脈中部のシャティリ (Shatili)、カズベギ (Kazbegi) から越境してグルジア領に入ったが、その内五百人がアゼルバイジャンとトルコに向かったという。一〇月、グルジア政府はグルジア国内に滞在するチェチェン人の動静掌握に努め、千

五百人の避難民がアフメタ郡に存在することを確認した。彼らのほとんど全員が女性と子供であつたが、半数はロシア領に職を求めていたグルジア国籍者の家族であつたという。また、同年二月、U N H C R は千二百人の難民をヘリコプターでシャティリからパンクスイに輸送した。⁽⁶⁾一九九九年二月にはチェチェン人のテロリストがグルジア国内でロシア外交官と家族を襲撃するのではないかという噂が流れたが、そのような事件は起こらなかった。この時点では両国政府間には何の対立もなかったと思われる。問題は単に両政府とも国境を管理する能力がなかったことである。

二〇〇〇年になると四月には東部グルジアのロシア国境は、武器密輸とチェチェン側傭兵・志願兵の越境ルートになっているという報道がなされた。同年五月には、日本人ジャーナリスト常岡浩介氏が、パンクスイがチェチェン人武装指揮者の待機基地になっていることを報道した。⁽⁷⁾また、武装したチェチェン人がパンクスイ渓谷を掌握し、アラブ人 (ヨルダン人、サウジアラビア人、またはイスラームに改宗したイエメン出身のユダヤ人とも言われる) ハッターブ (Abd al-Rahman ibn al-Hattab) のコマンド訓練学校が置かれていると報道された。一〇月には、ロシア領で追撃を受けたチェチェン側野戦軍司令官ルスラン・ゲライエフ (Ruslan Gelayev) が最大一五〇人の部下と共にグルジア側に越境したが、グルジア軍当局に武器引き渡しを拒否し、負傷者を残して撤退する事件が起こった。グルジア政府当局の否定にもかかわらずトルコの『ミットラト (Millat)』紙は、アフメタ郡のツィヌバニ (Tsinubani) 村には、

シヤミール (Shamir) とスルホ (Surkho) に率いられたキスト人、アラブ人、クルド人からなる三〇〇人の部隊が存在すると報道した。これ以降ロシアはグルジア政府にグルジア領内のチェチェン人ゲリラの掃討、引き渡しを要求するようになった。グルジア側は体面上ロシア政府の要求には応じかねたが、それ以上に問題だったのは、治安確保が困難な状況にあったことである。

トビリシのアメリカ情報筋は、パンクスイに一〇一八〇人のサウジアラビア人、ヨルダン人、アルジェリア人のテロリストが来たのは、九・一一事件以降であると述べるが、グルジア国家安全省は、二〇〇二年二月まで渓谷にアルカイダの資金による病院と射撃訓練場があったことを発表した。二〇〇二年フランスで逮捕されたテロリスト容疑者三人も、パンクスイでチェチェン人ゲリラおよびアルカイダの化学兵器専門家と接触したと自供、ロンドンでも同様の報道があり、シェワルナゼ大統領もアラブ人化学者二名がかって渓谷に滞在したことを認めた。⁽¹⁰⁾

二〇〇一年秋にはパンクスイ渓谷とロシア国境の間のトウシェイ (Tusheti) およびヘヴスレティ (Khevsureti) 地区でチェチェン側ゲリラの活動が目撃された。また、アブハジアのコドリ (Kodori) 川流域での、ゲライエフ配下の小部隊とグルジア人民兵のゲリラ活動が、ロシアのメディアで報道された。⁽¹¹⁾ グルジア政府はロシア政府の要求をかわすためにも、チェチェン人武装勢力を掃討する必要性に迫られるようになった。ロシア軍の導入を許すことはシェワルナゼにとって政治的自滅を意味するからである。このためシェワルナゼ

はアメリカに頼らざるを得なかったが、一方それは対露関係の陰悪化をもたらした。このような中、九・一一事件はグルジアには有利に働いた。二〇〇二年二月にアメリカ軍事顧問団がトビリシに到着した時、ロシア政府は露骨に不快の表情を示したが、三月、プーチン大統領は軍部を説得し、ウズベキスタンで可能な米軍進駐はグルジアでも可能であると宣言した。アメリカ政府はグルジアに対して、同国年間軍事予算の四倍近い六千四百万ドルの援助を供与、グルジア軍は三月二三日、特殊部隊を動員して、演習「コジョリ (Kodzori) — 二〇〇二」を実施した。⁽¹²⁾ 二〇〇二年五月にはグルジア領内のチェチェン人戦闘員最大数八百人と報道されたが、一方グルジア政府はグルジア領内において法的に問題のあるチェチェン人は六〇人までであるとリリースした。

二〇〇二年八月、グルジア国内で多数の人物を誘拐した有名なキスト人人攫いショタ・チチアシユヴィリ (Shota Chikhashvili) がモスクワで逮捕されたが、グルジア政府がチチアシユヴィリの身柄引き渡しを要求する一方、ロシア政府は身柄を確保されたチェチェン人兵士引き渡しを求めるという状況に陥った。これは後に双方が身柄を引き渡し、紛争の原因にはならなかった。

ロシア政府は、イヴァノフ (Ivans Ivanov) 外相が、八月八日のカザフスタン、アゼルバイジャンと共同のカスピ海での軍事演習に先立って、パンクスイ問題はロシアの武力無しには解決しないと述べて、グルジアを牽制した。八月二五日ついにグルジア当局はパンクスイ渓谷のキスト人集落に特殊部隊の投入を決定、九月二日に

は搜索を実施したが、武装集団は既に退去して、わずか数名の武器不所持者を逮捕したのみであった。⁽¹⁵⁾グルジアのシェワルナゼ大統領は在トビリシのチェチェン・イチュケリア共和国代表で、キスト人のヒズリ・アルダモフ (Khizri Aldamov) にチェチェン人のグルジアからの退去を要求したが、これは拒否された。⁽¹⁶⁾ロシア議会でグルジア領への越境攻撃の必要が議論され、グルジア議会でも、もしロシア軍越境があればグルジア国内のロシア平和維持軍の退去を要求しグルジアがCISから脱退することが決議された。⁽¹⁷⁾このような状況下においてグルジア内務省と国家安全省特殊部隊が渓谷の左岸で搜索を続け、街道から外れたハラツァニ (Khalatsani) 村を搜索、交戦の結果、アフマドフ (Ahmadov) 兄弟のグループに属する民兵が逮捕され、大量の武器弾薬が押収された。⁽¹⁸⁾また、秋の間には六〇人のゲリラが逮捕され、内外国人一四名がアメリカに引き渡されガタナモラに送られた。⁽¹⁹⁾

一方、九月にはロシア国境の監視に当たっていたOSCEの英トルコ・グルジア監視団のバトリール隊が一時捕虜になる事件が起こり、二〇〇三年六月にはアブハジアのコードリ川でもゲライエフの部下を含むチェチェン人によってロシア平和維持軍兵士が一時的に身柄を拘束された。⁽²¹⁾二〇〇三年一月にはパンクスイ北西に隣接するヘヴスレティへの米軍特殊部隊投入計画が報じられ、二月には春にゲライエフが五〇人の部下とともにグルジア領に越境する計画があるとして掃討作戦が展開された。この時カラチャイ人原理主義者四人が殺害されるとともに、捕虜になったアラブ人一人が米軍に引き

渡された。二〇〇三年初めの頃パンクスイのチェチェン人難民は八千人と言われたが、既に六千二百人はグルジア国外に移住、その内大部分はチェチェンに帰国した。その他に八百人がパンクスイを含むグルジアに残っていた。⁽²²⁾

グルジア軍および治安当局が身柄を拘束したチェチェン人ゲリラ容疑者のロシア引き渡し要求に伴って、両国政府の関係は陰悪化したが、六月には、ロシア側は千人までの規模のチェチェン人が、ロシア潜入をねらっており、ロシア軍がついに自らパンクスイを爆撃したという事実関係不明の報道があり、グルジアの有力政治家イリナ・サリシエヴィリ・チャントウリア (Irina Sarishvili=Chanturia) 女史は、ロシアはパンクスイにチェチェン・ゲリラがいると称してグルジアに侵入を計画しているとの声明を出した。⁽²³⁾

パンクスイ渓谷のゲリラ基地化は二〇〇二年のグルジア人治安部隊の搜索によって、またグルジア領へのゲリラ逃亡問題は二〇〇四年のゲライエフの戦死によって一応の解決をみた。また、二〇〇三年十一月の政変と翌年二月のサアカシエヴィリ (M. Saakashvili) の大統領当選は、ロシアに対して、チェチェン・カードを用いるシェワルナゼ型外交の終焉を意味した。

二 パンクスイ渓谷の歴史地理的情

パンクスイ渓谷はグルジア東部カヘティ (Kakheti) 地方アフメタ (Akhmeta) 郡の一地域である。カヘティは、グルジア東部がアゼルバイジャン、ダゲスタン、チェチェンに接する地域で、住民はカ

ヘティ人(グルジア語カヘティ方言の話者)およびグルジア系山地民トウシ人が主であるが、ヴァイナフ系キスト人、バツ(バツオイ)人、オセット人、アルメニア人、アゼルバイジャン人、アヴァール人などが居住する。アフメタ郡は同地北部に存し(面積二、二四八平方キロメートル)、主要都市アフメタ(都市部と二五集落を含む)は、人口八千七百人(一九七四)で、大コーカサス山脈といくつかの支脈を北に臨む、標高は五六七メートルの丘陵にあり、テラヴィ(Telavi)から二九キロメートル、トビリスイから一八四キロメートルの距離にある。同郡は一都市(アフメタ)と、(ソ連時代は)九村落ソヴィエト(sasoplo sabho)合計七五の集落によって構成されている。交通は東西の幹線アフメタ・プシヤヴェリ(Pshaveli)・ナパレウリ(Napareuli)・テラヴィ線と北に向かうそのトウシエティ枝線、およびアフメタ・ジョクロ枝線が主要なものである。⁽²⁵⁾

パンキスイ溪谷は大ボルバロ(Didi Boralo)山からアラザニ川平野までの南北三四キロメートル、幅は東西七キロメートル程の溪谷である。北に大コーカサス山脈、西にパンキスイ山脈に臨むのに対して、南はアラザニ川沿いの交通に恵まれていて、カヘティ地方の中心と深く結びついている。郡の最北部には、ロシア国境に接して歴史的・民俗学的地域であるトウシエティがある。アフメタ郡のほかの地域は南に向かって流れるアラザニ(Alazani)川の流域であるのに対し、この地域は東に向かって流れるダゲスタンのアンデイスキー・コイスー(Andiskiy Koyusu)川の支流であるピリキティ・アラザニ(Prikiti-Alazani)川とトウシエティ・アラザニ(Tusheti Alazani)

川及び付属の小河川の流域で、即ち大コーカサス山脈の北斜面にある。⁽²⁶⁾トウシエティは三千—四千米メートル級の山々に囲まれ、伝統的にはピリキティ(Prikiti)・ゴメツアリ(Gometsari)・ツォヴァ(Tsova)別称ツォヴァタ(Tsovata)・チャグマ(Chagma)の四共同体からなる住民は主として夏の牧畜に従事するが、冬季は交通途絶になるので一部の人々を除き、同郡南の低地に移動する。トウシ人の内、ツォヴァートウシ人のみが、ヴァイナヒ系のバツビ(Batsbi)語を母語とする。しかし、彼らは古くからのキリスト教徒で、母語には拘わらず自他ともにグルジア人と見られている。⁽²⁷⁾

アフメタ郡は、ロシアのチュチェン共和国との間にはイトウム・カレ(Ium-Kale)からチャントウイ・アルゲン(Chantwy Argun)川に沿って源流近くのアツンタ(Atsunta)峠からグルジア領シャティリに至る自動車による経路、テベロスムタ山の東の峠の他に一九世紀まで用いられていた幾つかの通路がある。またダゲスタン共和国との間にはアンデイスキー・コイスー川沿いの経路、またこの川の別の支流やアヴァールスキー・コイスー川支流の源流からコードル(Kodor)峠に入る道があった。パンキスイ溪谷はグルジア内部にあつて直接ロシアと国境を接していない。しかし同溪谷は同郡北部のトウシエティ地方および、同郡に接するヘヴスレティ地方を経由する伝統的な交通体系や地元民だけが知る間道を含めると、四通八達地であるといふことができる。⁽²⁸⁾

一九七〇年に実行されたグルジア・ヴァイナヒ人類学共同研究ではトウシエティからチュチェンへ運ばれる夥しい数の羊と牛が観察

されている。一方、チエチエンのイトウムカレからは、トウモロコシ、大麦、家庭用品が運ばれていた。また、トウシェティの家畜をテレクの平原に降ろし、塩、毛糸のロープ、馬の蹄鉄、釘、木の食器、荷鞍を仕入れる人々も見られたという。⁽²⁹⁾

三 パンクスイ渓谷の集落とキスト人住民

今日、パンクスイ渓谷にはチエチエン系の人々が住み、キスト(ロシア語ではキスティン *Kistyn*) 人と呼ばれている。キスト人はドウイスイ (*Duisi*) 即ち旧のパンクスイ・ツイヘ (*Dankisi Tsikhe*)、オモロ (*Omalo*)、ジョコロ (*Jogolo*)、ゼモハラツァニ (*Zemo Khalatsani*)、ビルキアニ (*Birkiani*) などに数千人が居住する。この人々に固有の言語キスト語は、言語学者によって北コーカサス語族のナフ・ダゲスタン語群のナヒ (或いはヴァイナヒ) 語に分類され、彼ら自身ヴァイナヒ人 (チエチエン人とイングーシ人及びその類縁の集団) であるともなしている。キスト語は言語上の特質上、イングーシ語ではなく、チエチエン語に分類するのが適当であるとされているが、これらの言語は非常に近い関係にあり、自由に理解ができると言われている。キスト語は家庭で用いられているだけで、教育、マスメディア、行政上の用語ではない。公的な場ではグルジア語が用いられるので、キスト人はキスト語とグルジア語のバイリンガル使用者である。

パツピ人のグルジア移住が中世に溯るのに対して、キスト人の大規模移住は一九世紀半ばになされたことが知られている。一八

世紀のグルジア人歴史家、地理学者ヴァフシェティ (*Vakhushti Bagrationi*) (一六九六—一七七〇) は、一八世紀のトウシェティの住民について述べ「キスティとグリグヴィ (*Gilgvi*) の方角に住むものは、主に彼らの言葉を話す。パルサマ (*Palsama*) の谷に住むものは、言葉も宗教も混ざっている」と記し、ピリキティ・アラザニ川渓谷の住民の混住状態について述べている。トウシェティの北部ではチエチエン語イングーシ語とグルジア語が混用され、その北ではチエチエン語イングーシ語が使用されていたのである。この記述自体はピリキティ・アラザニのトウシ人がヴァイナヒ化しているのか、そこにヴァイナヒが住んでいるのかは判断できないが、一八世紀グルジア国境に接してチエチエンとイングーシの南部にキスト人がいることが明らかである。ヴァフシェティの集落名称表では、パンクスイですら一九集落中の二集落がキスト人に因む名称を冠している。従ってもっと北のトウシェティでは、キスト人が居住していた可能性があるであろう。キスト人のグルジア移住は、一九世紀には一層加速される。後にシャミールが率いることになるイマーマット運動開始直後の一八三二年、キスト人三一〇家族がグルジア側に移住したが、そのうち一五五戸 (七七五人) はグルジア人であると主張したとの記録が残る。約半数がキスト人であったことがわかるが、今日サギルタ (*Saghta*) 村に三戸、インドウルタ (*Indurta*) 村に四戸などこのときの移住に関わる三二戸が現存し、ピリキティ各集落には、チエチエン系のクカラアニ (*Kukalანი*)、ダディアニ (*Dadiani*)、ベビアニ (*Bekiani*)、ボルジキアニ

(Bordzhikani)・ケレヒアニ (Kelekham) などの姓が残っている⁽³¹⁾。

パンキスイにおけるキスト人の記録に残る最初の大規模な移住集団は、ドウイ (Duiy) に率いられた人々であった。ドウイはシャミールのナイープ (代官) であったが、争いを起こしツモソ (Dzumoso)・タイプに属する部下を率いてロシア領グルジアに移住、ドウイスイ村を開いたと言われる。また、マイステイ (Maisti)・タイプに属するジョコラも一八五〇年頃、シャミールの圧迫と経済的困難に耐えかねてパンキスイの西の山地ティアネティ (Tianeti) に移住し、さらにそこからパンキスイに移住し、ジョコラ村を開いたとされる。これらの移住の事実には村人に伝えられた伝承や地方官の文章によって明らかであるがドウイスイ村のガルガシユヴィリ (Gargashvili) 家は、イングーシのガラシユキ (Galashuki) 村出身であり、彼の地のガウルギエフ (Gaurgiev) 家とは同族であることを互いに認識していると述べている。また、同じくドウイスイ村のハヌカシユヴィリ (Khanukashvili) 家はチエチエンのイトウムカレ近くのゲズイホイ (Gezikhoi) 村から、先祖がテプロスムタ峠を通過してこの村に移住した経緯を語り継いでいる。このようにパンキスイのキスト人もチエチエンとイングーシの同族と同じく、自分たちのタイプについて知っている。ここにはチエチエン人のヒルハロイ (Khil'kharoy)・ハチャロイ (Khacharoy)・マイステイ (Maisti)・ゲザホイ (Gezakhoi)・チナホイ (Chinakhoi) があり、イングーシ系のタイプは、ヴァッピ (Yappi)・ジェラホイ (Dzherakhoi)・ガラシユキ (Galashuki)・エレティ (Ereti) 等であると言つ。

山地民の間には、他のタイプに属する人々を編入するための制度があり、参加希望者が牛を屠ふり、ホスト側の人々と饗宴することによって行われた。山地チエチエンとグルジアのトウシでは、新来者は一定の身分的差別をうけるが、キスト人の同姓団体ゴール (goor) では、一切の差別はなく平等である。このように伝統的には新来のチエチエン人難民がキスト人の社会に統合されていくシステムが存在するのであるが、チエチエン人難民が故郷に近いトウシエティではなく、パンキスイに移動した理由は、ロシア軍の越境爆撃を恐れたこと、トウシエティでは冬雪が多く生活が困難であることとともにキスト人との民族的近縁性があげられる。

四 パンキスイ溪谷のイスラーム教

キスト人の祖先がパンキスイに移住した一九世紀半ば、北コーカサスではチエチエン人とイングーシ人の間にイスラーム教が広まりつつあったが、パンキスイ移住者のなかにもイスラーム教徒が見られた。六〇―七〇年代には、カラジャラ (Karadzhala) 出身の無名のムッラーがドウイスイで、子供達にアラビア語を教えた⁽³²⁾。カラジャラはアフメタとテラヴィイの間の村落である。この時親達⁽³³⁾はアラビア語の教育に反対したという。一方、グルジアでは、「カフカス正教復興協会 (Общество восстановления православия в Кавказе)」が創立され、キスト人にたいしても盛んに布教活動が行なわれた。その結果、一八六六年頃、パンキスイではキリスト教徒は七七一人で、普通にグルジア語を話し、子供たちはグルジア語

の学校に通っていたが、二〇〇人はムスリムで、ムッラーと札拝所をもっていた。さらに、一九世紀の末、キリスト教徒の中心ジョコロでは、キリスト教徒が一八七人、ムスリムが一八人であり、逆にドゥイスイでは、キリスト教徒四七人、ムスリム四九九人であった。⁽³⁵⁾この地域のイスラーム化の最初の頁を飾るのは、ハンゴシュヴィリ (Khungoshvili) 家の三兄弟、ゲビシヤ (Gebisna)、アヒガ (Akhiga)、ノンギ (Nongi) であった。長男ゲビシヤはメッカに巡礼してから布教活動を始めたが、兄弟の努力によりチエチエンから学識ある敬神家ヴァアタ (Yaata) が招聘され、ヴァアタの死後は新たにムッラー・クルマフ (Kurmakh) が招かれた。クルマフが十年程の滞在後帰郷すると、今度はレスギ人のムッラー・クルバン (Kurban) が招かれ、地元のキスト人女性と結婚して、ドゥイスイ村に留まった。パンクスイで最初にモスクの建設が計画されたのは、一八九八年ドゥイスイにおいてであったが、地方官憲の妨害にあったものの、ベラカン (Belakan) のムッラー、アブドゥラー・バカンオグル (Abdulla Bakan Oghul) が、トビリスイ (當時はティフリス) にあった南コーカサスのイスラーム事務局の長であるシャイフ・アル・イスラム (Shaikh al-Islam) に請願して許可を得、一九〇二年 (あるいは一九〇五年)、(ドゥイスイの西の、今日もプシャヴ人が住むクヴァレルツカリ (Kvarel Tskali) 村のプシャヴ人キステイシユヴィリ (Ikistishvili) の力により建立された。ベラカンは現在アゼルバイジャン領であるが、アヴァール人がまとまって居住する地域である。一九世紀までは、ジャロベラ

カニ (Jaro-Belegani) 自由共同体、ロシア統治期以降はザカタラ (Zakatara) 地方として知られる。パンクスイが北コーカサスとだけではなく、全体としてはシエア派が多いアゼルバイジャン北部のスニール派地域とも繋がりがあったことが明らかである。一九〇五年から三年間は、チエチエン人のムッラー・タヴソルタ (Tavsolta) が三年間勤務した。更に、一九〇九年にはアゼルバイジャンからナクシュバンディー (Naqshbandi) 派神秘主義教団のシャイフ・イス・エフエンディ (Is Efenidi) 別名イサ・シャイフ (Tsa Shaikh) がドゥイスイで教団を開いた。イサは一九二〇年に死亡したが、信者は金曜日毎に、男は夜、女は昼に別れて、彼の旧宅で修行を続けた。イサの墓は、グルジア共和国ラゴデヒ (Lagodekhi) 郡のカバラ (Kabala) 村にあって巡礼の対象になっている。しかし、ソヴィエト政権成立後、モスクは閉鎖された。⁽³⁷⁾ナクシュバンディー教団は、一八世紀のシャイフ・マンスールの乱、一九世紀のイマーマット運動の原動力となった。しかし、イマーム・シャミールの降伏の後、有力派シャイフはトルコに亡命したと言われる。瞑想を以て修行の方法とするナクシュバンディー派は、ダゲスタンでは古くからのイスラームの影響下にあった平地に多く、ソ連時代にはソヴィエト当局に忠実であったと言われる。

コーカサスではナクシュバンディー派と並んで、カーディリー (Qadiri) 派が有力であったが、前者の修行が瞑想を以てする静かなものであるのに対し、後者は大声で神の名を唱えたり、走り回ったりする騒々しいものである。この後、モスクを再開するために

ドゥイスイ出身の、カーディリー教団のシャイフで、クンタ・ハッジ (Kunta Khaji) に繋がる修行者マチグ・マチャリカシユヴィリ (Machag Machikalashvili) が、イングーシから帰郷、教団の基礎を置いた。クンタ・ハッジは、一九世紀後半、戦争に厭いたチエチェン人とイングーシ人の間に信者を広め、勢力拡大に疑いの目を向けたロシア当局によって逮捕され、流刑処分を受け、流刑地で客死した(一八六七)。彼の死後はその四人の弟子が、独立した教団を創設し、師父の教えを広めた。さらに一九二八年にはチエチェン人シャイフ・アドウ (Shakh Adu) が、新たにカーディリー教団の支部を開設した。彼は行のために太鼓を用い、男子はあごひげを伸ばし、白い帽子を被るようになった。アドウの帰郷後はムッラー・ケリム・ドゥイシユヴィリ (Kerim Duisvili) が教団を引き継ぎ、日曜日シャイフの旧宅で行をおこなった。アドウの墓はチエチェン共和国ヴェデノ郡のドゥイシユネ・ヴェデノ (Дашне Ведено) 村にある。ついに一九六九年にモスクが再建されたが、それでもズイクルが行われ、アラビア語とキスト語で賛歌 (nazm) が歌われた。六〇年代以降、ドゥイスイ以外のオマロ、ビルキアニ、ジョコロにも神秘主義教団の支部が置かれ、老人だけでなく、若者も参加するようになった。⁽³⁸⁾ 一方バンキスイでは一九世紀のロシア政府による積極的正教化の影響も残り、現在でもオマロ、ジョコロにはキリスト教徒が見られる。

ソ連崩壊後バンキスイの社会は大きく変わった。特に、一九九九年の第二次チェチェン戦争以後の変化は著しい。一九九六年から二

〇〇一年までの間に、渓谷には四つの新しいモスクが建設された。その最大なのは、ドゥイスイのウスア・マルゴシユヴィリ名称中学校の近くに建てられた煉瓦建のものである。⁽³⁹⁾ このモスクの写真はウェブ上で公開されている。現在ではどの集落にもアラビア語学校があり、さらに上級の教育施設も設けられた。校長およびNGO団体の努力で、五〇人の生徒が外国の学校へ留学していると言われる。他方父兄の中にはアラビア語教育に反対し、政府の管掌を求める声も上がっている。⁽⁴¹⁾ さて、九・一一事件以後アルカイダとの関係を疑われて資金の移動を凍結されたサウジアラビアの機関に国際慈善基金BIF (Benevolence International Foundation)、アラビア語名アルビルアルダウラ (Al-Bir al-Dawala)、ロシア語名メジュドナロドヌイ・ブラゴトヴォリテリヌイ・フォンド (Международный Благотворительный Фонд) があるが、同基金はドゥイスイにも支所をもっている。⁽⁴²⁾ モスク、学校の建設、学生留学等の費用は、直接・間接にここから支出されたものであろう。特に、一九九一—二〇〇〇年にアラブ人布教団が目立ったことは、トビリスイのヨーロッパ諸国大使館筋の情報にある。ただ、アメリカ当局観測の、九・一一事件以降渓谷に一〇—八〇人のサウジアラビア、ヨルダン、アルジェリア人テロリストが潜入したとする情報は、テロリストと布教者を区別しているかどうか不明である。これらアラブ系布教団体は、狭義のワッハブ主義であれば土着イスラーム教を多神教すなわち非イスラーム教であると厳しく攻撃し、あるいはロシアで多用される広義のワッハブ主義であっても、真のイスラーム教を標榜

して、非イスラーム的習慣を非難する。ダゲスタンにおいては、葬礼を巡って、ワツハープ派と神秘主義教団員が激しく衝突しているが、パンキスイではそのような事例は報告されていないようである。ドウイスイ村にシャリーア法廷が設置された件は、治安の悪化に対する自己防衛とすることも出来る。パンキスイにおける所謂「ワツハープ派」信者は、政府に派遣されたパンキスイの行政責任者ツァヰキヰヰエ (Timur Tsadikidze) によると五百人に達するという⁽⁴⁶⁾。即ち、人口の五—一〇%である。ダゲスタンでは葬儀を巡って、伝統的イスラーム教徒と「ワツハープ派」との対立が始まり、多くの社会的側面に拡大されさらに、ワツハープ派の独立の宗教自治体 (ジャマアアット) が宣言され、武力紛争に至った経緯がある。パンキスイにおける状況も安心できるものではないであろう。

グルジア政府の治安能力の低下と、地域の人口に匹敵するチエチエン人の流入は、もとの非キスト人住民を深刻な状況に陥れ、一九九八年から二〇〇二年春までには、ドゥマストウリ (Dumasturi)、クヴェモ・ハラツァニ (Kvemo Khalatsani)、ツィスバニのオセツト人は、不動産を放棄して、北オセチアに移住し、コレティ Koreti 村の住民も移住の準備中であるという⁽⁴⁷⁾。また、ゼモ・ハラツァニのプシャヴ人は不動産をキスト人に売却して、移住した⁽⁴⁸⁾。かくして、渓谷のアラザニ川左岸ではキスト人の村だけが残った⁽⁴⁹⁾。渓谷はアラザニ川に沿って南北に細長く伸びていることは、既に述べたが、川の右岸にはバアツァ・ニコ (Baatsa Niko) = トウシェティ街道が川筋と平行に通り、クルタナツェウリ (Kurtanadzeuli) 川から

トロシヨス・ツカリ (Toloshos Tskali) 川までの間にドウイスイ、ジョカロ、ビルキアニ、ツィバヘヴィ (Dzibakhebi) の中心を通る。これらはキスト人の村である。街道の左手の丘陵にはプシャヴ人の住む五集落が点在する。街道の左手がアラザニ川であるが、川の左岸にドゥモストウリ以下のオセツト人の集落がまとまっていたのである。ただし、古い資料にゼモ・ハラツァニは、以前のプシャヴ人の村で現在キスト人が住むとあるので、この村のキスト人化とチエチエン人難民流入とは直接関係がないものと考えられる。

結 語

本稿は、二次的文献を用い、何故パンキスイ渓谷にチエチエン人難民が収容され、また、チエチエン独立派ゲリラや国際支援組織の根拠地になったかを、地理的位置、民族的帰属、宗教の観点から考察したものである。グルジア・ロシア国境から数十キロ入ったパンキスイ渓谷は、一九世紀半ばから今日のキスト人の祖先であるチエチエン人、イングーシ人が居住して独自の言語と習俗、親族構造を残し、また現在に至るまで北コーカサスの同族と帰属共有の記憶を持っている。両者の間に住むキリスト教徒のトウシ人は、国境の高地と東グルジア内部の平地にわたるトランスヒューマンズを行なうだけでなく、ソ連時代も北コーカサスと経済交流のシステムを持っていた。宗教的に見るならば、キスト人の多くは、伝統的イスラームの信者であって、ナクシユバンディー派、カーディーリ派の神秘主義の信者も見られるが、この地域でもソ連崩壊以降、所謂イス

ラーム・ブームが生じ、アラブ系の教師と資金によって、原理主義的イスラームの布教がなされていた。戦争難民に留まらず、独立派ゲリラやアラブ系志願兵にとっても、ここに住むことは容易であったと思われる所以である。

九・一一事件以降、アメリカ合衆国は南コーカサスにも行動のための資金や実兵力を供与した。ロシアもアメリカの作戦に反感を持ちつつ、ある種共同の反テロリズム作戦を実施、国境封鎖を厳しくした。この作戦は、二〇〇二年夏のグルジア警察の渓谷内村落での捜査と、二〇〇四年早春二月のルスラン・ゲラエフ戦死によってロシアとアメリカの双方にとって一定の成果を見た。しかし、グルジア外相メナガリシュヴィリ (Irakli Menagariashvili) (当時) が述べるように、「チェチェン問題が解決しない限り、パンキスイ渓谷の問題再燃の危険性は、まさに、国境での状況と同じく、残っている」⁽⁵⁾ のである。

【参考文献】

KP: Комсомольская Правда
MN: Moscow News
HT: Независимая Газета

北川誠一『ダゲスタンのイスラム』(リーフレット)、東北大学、一九九九年

Bagdasarian, L. The Southern Caucasus in the New World Order Context: Who Wants Terrorists?, *Central Asia and the Caucasus*, No. 5, 2002, pp. 29-36

Dzebisashvili, K. Russia and Georgia: A Future Hard to Predict, *Central Asia and the Caucasus*, no. 3, 2000, pp. 50-55

Грузино-севеороссийские взаимоотношения (Сборник), Тбилиси, 1981

Kurtsidze, Sh. and V. Chikvani, Georgia's Pankisi Gorge: An Ethnographic Survey, University of California, Berkeley, 2002, <http://www.berkeley.edu>

Маргошвили, Л. Ю. Кавказско-тбилисские взаимоотношения между Грузией и Чечено-Ингушетией, Тбилиси, 1990

Месхиадзе Дж. Кисты, Ислам на территории бывшей Российской империи, Т. 2, Москва, 1999, с. 48-50

Шархелишвили, А. Л. Из истории горцев восточной Грузии, Тбилиси, 1983

Skakov, A., On Two Sides of the Border: Georgia and Chechen, *Central Asia and the Caucasus*, No. 2, 2000, pp. 161-164

Османов, М. и И. Азироев, История и культура Вацхаев, Москва, 2003

Pchavela, Vaja, *Le Manguer de serpent*, Moscou, 1984

Topichishvili, R. *Aghmosculet sak'artvelos mtielia migratsia XVII-XX ss.* Tbilisi, 1984

Волкова, Н. Л. Этнические и языковые Северного Кавказа, Москва, 1973

Yemelianova, Galina. Islam in Russia: an Historical Perspective, pp. 15-60 in *Islam in Post-Soviet Russia: Public and Private Faces*, Hilary Pilkington and Galina Yemelianova, London and New York, 2003

(1) HT, 19, 28 марта, 1999

- (2) *Pravda*, 19 июня, 2001
- (3) ダリヤ・アスラモヴァ (Daria Aslamova) によるインタビュー。
KII, 25 сентября, 2002
- (4) Skakov, p. 152
- (5) *HT*, 19, 28 марта, 1999
- (6) <http://www.unic.or.jp/recent/pastnews/121799.htm>
- (7) 『Sapio』二〇〇〇年十一月八日 <http://www.members.jcom.home.net.jp/ermondram/pankisi/2460>
- (8) *The Guardian*, March 26, 2002
- (9) *HT*, 16 января, 2003
- (10) *MN*, January 22–28, 2003; <http://www.listen-voa.com/007/638/638html>
- (11) *KII*, 18 октября, 2001
- (12) *HT*, 26 марта, 2002
- (13) *KII*, 2 августа, 2002
- (14) *KII*, 30 августа, 2002
- (15) *MN*, August 28–September 3, 2002
- (16) *HT*, 13 сентября, 2002
- (17) *MN*, *ibid.*
- (18) *HT*, 19 сентября, 2002
- (19) *Time*, Oct. 19, 2002
- (20) *HT*, 26 сентября, 2002
- (21) *HT*, 11 июня, 2003
- (22) シヤビフ・ノンチンホヴァリ (Jarap Khangoshvili) の言。アスラモヴァ記者とのインタビュー (*KII*, 25 сентября, 2002)
- (23) *HT*, 16 июня, 2003
- (24) *KII*, 2 марта, 2004; *HT*, 2 марта, 2004
- (25) *Kartuli Sapochka Entsiklopediya*, T. II, p. 106
- (26) *ibid.*, p. 663
- (27) グルジア百科事典では、バツビ語の話を三千人とするが、オスマノフとアリロエフ (Османов и Алироев, c. 83) は、五千人程度と見ている。双方とも一九七〇年代の推計二千四百人 (Skakov, p. 151) に基づくものであろう。チェチェン人はノフチ、インゲルシ人はガルガイなどと自称し、合わせてヴァイナヒと称する。ただし、チェチェン人、インゲルシ人、バツビ人の総称をナヒと称するという説 (Османов и Алироев, c. 84) には異論も見られるであろう。バツビはグルジア人からもチェチェン人・インゲルシ人からもグルジア人であると見られてきたからである。
- (28) Магомедия, c. 35–44
- (29) Шахелишвили, c. 62
- (30) キスト人の人口は、五千から一万人であると言われている。最大では一万人とする主張がある (Османов и Алироев, c. 83)。一方、クルツキズェとチロヴァニは五千と推計する (Kurtskidze and Chikviani, p. 3)。ロシアのジャーナリストは、しばしば六千とする数を使用する。スカロフの五千六千 (Skakov, p. 151) があり、アフメタ郡警察署長ズラブ・トゥッシェリ (Zurab Tusheri) 氏のリリースする七千とする数 (The Terrorism Research Center, 2004, July 1 ‘ハイパー版’、またすでに一九九九年に七千人であったとする (Blandy, C.W. Pankiskioje Gorge: Resedants, Refugs & Figures, Conflicts/Studies Research Center, March, 2002) 者があり、八千人と推定する (Georgia’s Chechen Minority Allegedly Spreads “Corruption” <http://www.iga/v/mineralsh/archive.109322199-21.html>) もある。このソースはママカ・アレシツェ氏であると思われる)。八千人または一万人より多くない人数 (V. Dubnov To the Health of a Potential Enemy, New Times, Jan. 2004 <<http://newtimes.ru/detail.asp?id=640>>) はこれらの数字を勘案してのものであろう。一九四〇年代初期の人口二、七四〇人 (Skakov, p. 151) に、人口増加率を乗じて計算するよりもよいであろう。

- (31) Шахелишвили-1983, с. 136-168
- (32) Марошвили-1990, с. 65
- (33) Марошвили-1990, с. 232
- (34) Kurtside and Chikvani, p. 31
- (35) Марошвили-1990, с. 212-215, 230-231
- (36) Марошвили-1990, с. 15
- (37) Марошвили-1990, с. 139
- (38) Марошвили-1990, с. 231-239
- (39) Kurtside and Chikvani, p. 34
- (40) <http://www.zahara.dk/Duisi%20Mosque.htm>
- (41) Kurtside and Chikvani, p. 34
- (42) <http://www.mof.go.jp/jouhou/kokkin/ko1411a.htm>
- (43) Traynor, Ian, Georgia: US Opens New Front in War on Terror. *The Guardian*, March 20 2002, <<http://www.guardian.co.uk/print/0%2c38%2c4377612.10368%2c200.html>>
- (44) *ibid.*
- (45) Kurtside and Chikvani, p. 40
- (46) Sharon La Franiere April 28, 2002
- (47) *Ibid.* p. 36
- (48) 一九九二年から一九九四年にかけて、スヴァン人ジャヴァ・イオセリアニ (Java Ioseliani) の「騎士団 (Mkhedronti)」と「キスト人」の間で衝突が起きている (Skakov, p. 152)。
- (49) *ibid.* p. 40. ただし「クルツイズエ・ニコヴァニ (Kurtside and Chikvani, p. 41) はこれを近年の出来事のように記すが、スカコフ (Skakov, p. 152) は「一九九二年の (ウラジカフカース近郊ブレロロドノイ地区を巡るオセツト・) イングーシ紛争の結果、渓谷でも緊張が高まったとする。グルジア内のチェチェン人も一九四四年に追放処分を受けたが、その詳細については研究がないようである。」
- (50) Марошвили-1990, с. 15
- (51) *HT*, 21 фс6р-ага, 2003
(きたがわ せいいち 東北大学大学院)

Ethnic and Confessional Backgrounds of the Pankisi Valley Issue

KITAGAWA Seiichi

Between 1999 and 2004, the issue about Chechen and foreign fighters in and around the Pankisi Valley in one of the districts of the Eastern Georgia was a focus of political negotiations in the Georgia-Russia, Georgia-USA, then Russia-USA relations.

The majority of the residents of the valley are the Chechens and the Ingushes, who are called as the Kists there. Using historical and ethnographic literatures by Margoshvili, Shavkhelishvili and others which describe the immigration process of the Chechens and the Ingushes to the Pankisi Valley in the 19th century, this paper underlines the importance of traditional and national homogeneity between the Chechens and the Kists, which keeps their mutual relation and fellow feeling in the both sides of the Great Caucasus. As the Kists had no right as ethnic minority in the Soviet era, they could have merged into the Georgian masses, if they had no relation with the Chechno-Ingush Republic and the people living there. This is how the valley still remains as a semi-independent enclave of Chechnia within Georgia.

The majority of the inhabitants of the valley are Sunni Muslims. Then the Pankisi Valley has a strategic value, as one of the Sunnite outputs from the Chechen and Daghestan into the South Caucasus. It is also witnessed there the re-islamization during and after the Perestroika era, the coming of the foreign missionaries and the rising in the popularity of the so called the Wahhabites among the local people.

Even after the violent death of a Chechen field commander Ruslan Gelayev and the end of the War against the Terrorism in Georgia, the Kists remain as the Chechens and their majority are the Muslims. Excepting the Kists, there are the Georgian Pshavs, the Tushes and the Ossets in the valley. Any ethnic or confessional clash would be reflected in a wilder arena. With potential cause of discontents to the Georgian government, the strategic importance of the valley in the process of integrity of Georgia's ethnics and regions into one single civil society is still existing, as well as in the regional security of the South Caucasus as a whole.